木下順二評論集 9

木下順二評論集

1958~1959年

5

未来社刊

木下順二評論集　5　【全一〇巻】
一九七四年一二月一〇日　第一刷発行

定価一六〇〇円
©著者／木下順二
発行者／西谷能雄
発行所／株式会社未来社
東京都文京区小石川三の七
電話(八一四)五五二一〇代表
振替東京八七三八五番
本文印刷＝新協印刷
装本印刷＝形成社
製本＝今泉誠文社

落丁・乱丁本には責任を負います　検印廃止

凡例

一、本評論集全十巻は、木下順二の評論、随想のほとんどすべてを可能な限り時間順に収録したものである。但し各巻の内容は、次の六項目に分類整理される。

Ⅰ　主として演劇一般について
Ⅱ　主として自作について
Ⅲ　主として演劇外の問題について
Ⅳ　（しゝ上を〃自〃に即してのものとすれば）主として〃他〃について
Ⅴ　主としてシェイクスピアについて
Ⅵ　その他（あるいは主として馬について）

なお、単行本として既刊の『ドラマの世界』（中央公論社、一九五九年、未来社、一九六七年）、『ドラマとの対話』（講談社、一九六八年）、『随想シェイクスピア』（筑摩書房、一九六九年）及び『シェイクスピアの世界』（岩波書店、一九七三年）は、それぞれ一貫したテーマによる一冊本であるゆえに、本評論集に収録しない。『日本が日本であるためには』（文芸春秋新社、一九六五年）は、雑誌論文などを集めた評論集であるゆえに、分解して本評論集に収録する。

一、本評論集は全十巻をもって構成され、それぞれの巻には、次にかかげる年度内に執筆されたものを収録している。

第1巻　一九三五年から五〇年まで
第2巻　一九五一年から五三年まで

第3巻　一九五四年から五五年まで
第4巻　一九五六年から五七年まで
第5巻　一九五八年から五九年まで
第6巻　一九六〇年から六一年まで
第7巻　一九六一年
第8巻　一九六二年から六四年まで
第9巻　一九六五年から六七年まで
第10巻　一九六八年から七〇年まで

一、本評論集は、現代仮名づかいで統一したが、収録文章が三五年間にわたっているため、漢字の用法その他で不統一な部分がある。しかし、当時の文体を尊重してそれらはそのままとした。

一、各篇末尾に、初出の誌紙名・年月日を判明する限り付した。

一九七二年一〇月

編集　菅井　幸雄
　　松本　昌次

*おことわり　紙数の都合上、当初は全8巻の予定でしたが2巻増え、全10巻となります。ご諒承下さい。（編者）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

木下順二評論集 5

目次

凡例

I

戯曲の構造と書き方……一
ドラマの問題……三八
ドラマとは何か……四三
現代のドラマトゥルギー――「葛藤について」の序説……六四
うらやましい練習風景――モスクワ芸術座日本公演によせて……七二
モスクワ芸術座の来演と翻訳劇の問題……七六
〃行間〃に示される妙味――モスクワ芸術座『桜の園』を見て……八一
練り上げたアンサンブル――モスクワ芸術座の陰に……八四
LUDUS私観――「詩的」と「現実的」と……八六
戯曲とは何か……九六
「名作」のない日本の新劇……一一四
今日の新劇と戯曲……一一七
シング……一二一
もしも私が外国人として……一二四
演劇の本質――戯曲の面から……一二七

II

オペラの『夕鶴』と劇の『夕鶴』……一五九
原作者のことば……一六二
初のカラーテレビ劇『赤い陣羽織』を観て……一六四
『東の国にて』を書きおえて……一六六
戯曲を書くという仕事――『東の国にて』を書き終えて……一六九
つけにくかった題名『東の国にて』――空しい犠牲と奇妙な矛盾……一七二
再演への期待……一七六
劇研の稽古場にて……一七七
発展も民話的に……一七九
第二幕（文学自伝）……一八一

III

音読のすすめ……一九七
ことばづかれ……一九九
歴史について……二〇四
日本人――「民話の会」で……二〇六

日本人……二二七
温泉と紅葉の記憶について……二三〇
新しい精神的姿勢……二三二
「ウェスト」について……二三五

Ⅳ

日本の民話と昔話……二四一
吉田暎二・『写楽』……二四四
西川右近君への期待……二四六
構造的ということがこれからの課題……二四八
石光真清・『城下の人』『曠野の花』……二五三
岡本太郎・『日本再発見』……二五五
『長い墓標の列』について……二五七
『長い墓標の列』のこと……二五九
「民話」編集後記……二六二
ゴルチャコーフ『モスクワ芸術座の演劇修業』……二六四
カミュ的とサルトル的とそして……二六五
あの確信にみちた顔——岡倉士朗氏の死を悼んで……二六七

三十年新劇と共に――岡倉士朗氏を偲ぶ……二七〇
演出者としての岡倉さんのこと……二七二
岡倉士朗氏をいたむ……二七五
岡倉士朗氏の業績……二七八
河竹繁俊・『日本演劇全史』……二八一
『俳優の像』（一八九〇年作・油絵）――ファン・ゴッホ展から……二八五
宮本常一 山本周五郎 他・監修「日本残酷物語」①『貧しき人々のむれ』……二八七

V

シェイクスピアの魅力――歴史を動くものとして描き得た人……二九三
『マクベス』……二九六

VI

（ココニ該当スル文章ハコノ時期ニハナイ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

I

戯曲の構造と書き方

どこかのサークルのすみっこで、さて、おれも戯曲というものを書いてみようかなと一人で考えている誰かへ語りかけることばのつもりで、この文章を書いてみようかと思います。戯曲というものを書いてみたいと思うのだが、何か手頃の便利な参考書みたいなものはないかなと、あなたは考えているにちがいない。これが小説なら、とにかく文章で書くものなんだから見当もつくが、戯曲となるとどうももう少しヤヤコシイものらしい。戯曲とはこういうものだと、スカッと説明してくれる虎の巻があると都合がいいんだがな。……

そういう虎の巻なんかあるものではない、というのが、こういう場合に誰でもものいう答です。私もほんとはそう思う。「戯曲の構造と書き方」などというこの与えられた題名は、ありもしない虎の巻をあるように思わせる点で、相当ケシカラン題名だと、実は思っているところです。だが、そういってしまったのではどうにもならない。とにかくいっしょに考え始めて行ってみることにしましょう。

まず、なぜあなたは、小説でも詩でも随筆でもない戯曲というものを書いてみたいと思うのか。他の芸術形式ではない、まさに戯曲という形式でしかあらわせない素材に今ぶつかっているから、あなたは戯曲を書きたいと思うのか。

そんなことはおそらくないだろう。いや、あとでも述べるように、本当はそうでなければならんのだけれども、しかし最初からそんなむずかしいことを考えているわけがない。あなたはただ、戯曲というちょっと特別な形式を、まあいわば好奇心みたいなものから、ちょっと使ってみたいと考えているのにちがいない。あるいは来月あるはずの文化祭に、うちのグループでやる芝居を、おまえが書けとおしつけられて弱っているのにちがいない。あるいはまた、サークルのむすびつきを強めるためのいい方法の一つとして演劇をやろうと思うのだが、さていくらさがしてみても、うちのサークルに適当な既成の戯曲が見あたらないので、そこでしかたなしにおれが何か書かざるを得なくなったとか。

それは今はどうでもいいのです。どんな理由からにしろ、とにかく戯曲を書こうというわが同志のふえることは、戯曲が仕事の私にとってこんな心強いことはありません。ところであなたは、一体どんな素材を書いてみようと思っているのですか。

こういう仮定をしてみよう。なにか最近おもしろいことはなかったかなと考えているうちに、あなたが次のようなことを思い出したとしてみましょう。このあいだ、中学校の同窓会、といっても同じクラスだった十数人が久しぶりに集まって大いになつかしかった。だが、なつかしいと同時にびっくりしたのは、卒業以来たいして年数もたってないのに、ずいぶんみんながそ

れぞれに変ったということだ。当時のままの少年らしい顔つきで大学生の制服を着てるのもいれば、すっかりオッサンのような感じで、すでに一軒の雑貨店の主人になっているのもいる。かと思うと現場の労働者として組合運動に猛烈に熱心らしい男もいるし、すると一方では自衛隊員になって、自慢そうに制服を着こんで来た奴もいる。とにかく大変おもしろかった。ということがあったとします。

おもしろかったという漠然たる印象がまずここに残っている。そこでもしこれが随筆なら、その漠然とおもしろかったというあなた自身の感想を書くだけでも、ことがすまないわけではないでしょう。極端にいえば、今私が上にしゃべった三〇〇字ほどのことばを、もう少しおもしろいいいまわしで、もう少し引きのばして書いて、そして最後に、「とにかく大変おもしろかった」と書けば、一応読者も、なるほどおもしろいと感じてそれで一応ことがすむ。

ところがもしこれを小説にするのだったら——といっても、これだけの素材からどんな複雑な小説だって生れ得ないわけではないけれど、まあ一番単純な形式を考えてみると、まず必要なことはこういうことではないだろうか。右の随筆の場合は「とにかく大変おもしろかった」というあなた自身の感想がナマのまま最後に出されて、そのあなたの感想に読者が共感することで一篇の随筆が成り立っているというわけだ。しかし小説にするとなると、そういうあなたのナマの感想をそのまま書くのではなくて、なぜあなたがそういう感想を持ったのかというそのいわば理由が、客観的に書かれることが必要なのです。つまりその同窓会に集まった一人一人、あるいは代表的な何人かの人間が、読者もそこに今いあわせているという感じを持つくら

い生き生きとありありと描かれることが望ましい。そういう「描写」が大切である。そしてその結果、「とにかく大変おもしろい」ということを、あなたがいうのではなくて、読者が感じること、それがまず必要なのだと思われる。このことの上に立って、この小説の内容をいくらでも複雑にして行くことは可能です。たとえば席上、久しぶりの会合だからややよそゆきのことばでお互いほめあっていたのが、先に帰ってしまう人がだんだん出てくると、あとの連中のあいだでは、きっと何か今帰った人のわるくちが出るとか何とか。

ところで、これを戯曲に書くというだんになると、どういうことになるでしょうか。

まず考えられることは、この小説の描写をそのまま戯曲の形に書きかえて、それで上演できないわけではない。つまり幕があくと、その一室に十数人の同窓生どもがすわって雑談をしている。おくれてはいって来るものもあり、彼らがそれぞれに面白い気のきいた、そしていかにもその人の性格や職業をあらわすようなセリフをとりかわして、中には酔っぱらって口論をするものも出て来たり、そしてやがて一人二人と帰って行く。最後に残った一人が、「面白いもんだなあ、あれから一〇年もたってないのに」とポツンと言って出ていってしまう。あとは徳利や皿の雑然とちらかった空っぽの部屋。ちょっとシュンとしたような間があって、そしてすうっと幕がおりてくる。

セリフの書き方さえ気がきいていれば、これでけっこう三、四〇分のあいだ、お客さんたちをおもしろがらせ共感させることができないわけではない。ですからこれでも芝居をやったということにはなり、台本をつくった人は、これで一本戯曲を書きましたということになる。事

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c